

大学が教育・研究で 地域の課題解決に取り組む



清成忠男

法政大学学事顧問(法政大学元理事長・総長)

COCの公募によって、大学間に競争が生じ強い刺激が与えられている。政策の意図する地域再生は可能だろうか。問題点を取りまとめた。

1 地域間格差の拡大

地域再生の在り方は一様ではない。地域間格差が拡大し、地域問題が多様だからである。経済のグローバル化の進展とデフレの長期比が、多くの地方の疲弊をもたらした。しかも、少子高齢化が進み、わが国は全体として人口減少社会に移行した。そして、人口減少社会を先取りする地方が、全国各地に出現している。

そこで、まず、最近における人口の推移を見ておこう。2000年から2012年までの間に、わが国の人口総数は、0.2%減少している。この間に人口が増加したのは、埼玉、千葉、東京、神奈川、愛知、滋賀、福岡、沖縄の8都県にすぎない。残りの39道府県は、すでに人口減少傾向にある。

そして、人口全体に占める65歳以上の老年人口の比率は年々上昇し、2012年には23.4%に達している。この比率は、人口減少の著しい地域において高い。

人口減少の著しい上位5県の状況を見ると、表1の通りである。過疎地域を多く含む県において人口減少が著しい。老年人口比率が大き

く、社会保障費が重い。生産年齢人口比率が小さく、経済活動が活発でない。その結果、所得水準が低く、税収も少ない。移入が移出を大きく上回り、域際収支は赤字である。この赤字は、これまでは財政資金で補填してきた。雇用の機会が少ないから、若者は流出し、人口は減少する。大学進学率も低く、高知県や島根県においては私立大学が成り立たない。

こうした地域においては、新産業の創出が必要であるが、それは容易ではない。地域振興の担い手の高齢化が進み、活力の低下は避けられない。

逆に、前述の人口増加都県においては、経済活動が活発であり、所得水準も高い。老年人口の比率もそれ程高くない。

人口増加8都県と人口減少39道府県を対比すると、表2

表1 人口減少の著しい県

	人口				1人当たり県民所得	
	2000	2012	減少率 (%)	老年人口 (%)	金額	指数
秋田	1,189	1,086	8.7	29.8	2,356	84.4
岩手	1,416	1,318	6.9	27.2	2,214	79.3
山形	1,244	1,160	6.7	27.7	2,223	79.7
高知	814	766	6.6	29.0	2,017	72.3
島根	762	713	6.4	29.2	2,265	81.2
全国	126,926	126,660	0.2	23.4	2,791	100.0

資料：総務省「国勢調査2000年」「住民基本台帳に基づく人口調査2012年」
総務省「県民経済計算年報2009年」
(注)人口は単位千人、金額は単位千円

表2 人口等の地域別シェア (%)

	人口増地域	人口減地域	合計
人口(2009年)	39.5	60.5	100.0
名目総生産(2009年)	44.2	55.8	100.0
大学数(2012年)	41.6	58.4	100.0
大学教員数(2012年)	48.3	52.8	100.0
大学学生数(2012年)	50.2	49.8	100.0

資料：内閣府「県民経済計算年報」 文部科学省「学校基本調査」
(注)人口増地域は8都県 人口減地域は39道府県

のようになる。人口増地域は人口では39.5%であるが、名目総生産では44.2%を占めている。このことは、人口増地域は所得水準が高いことを意味する。人口増地域の1人当たりの県民所得は、人口減地域の1.3倍に相当する。さらに、大学の状況を見ると、人口増地域のシェアは大学数41.6%、教員(本務者)数48.3%、学生数50.2%となっている。人口に比べて、大学のウエイトが大きいのである。

また、老年人口の割合の小さい都県を見ると、沖縄17.0%、神奈川20.9%、東京20.9%、愛知21.1%、滋賀21.1%、埼玉21.2%、千葉22.0%と続く。逆に、生産年齢人口の割合は大きい。つまり、人口増地域は、地域振興のポテンシャルが大きいといえよう。

いずれにしても、地域再生の必要性が強い地域ほど、再生が困難である。これに対して、地域振興の可能性に恵まれている地域においては、ポテンシャルの大きい大学が数多く立地している。いわば当然のパラドックスが存在しているのである。

2 地域再生の担い手

COCは、タイムリーな政策プログラムである。すでに疲弊した地域が全国的に広がっているし、今後さらに広がるおそれがある。前述した人口増加地域であっても、人口減少の気配が生じ始めている。これまでは1都3県が伸びてきたが、部分的に人口減少地域が生じている。わが国はすでに人口減少社会に移行しているから、人口減少地域が拡大するのは当然の傾向である。

したがって、どのような地域においても、多かれ少なかれ再生の必要性が強まる。それだけに、COCはタイムリー

である。ただ、問題は地域の概念である。もともと地域の機能は多様であり、地域の範囲は機能によって異なる。地域は、まさに立体的、重層的な概念である。しかも、最近では、IT社会への移行により空間概念に変化が生じている。空間的にまとまった範囲だけが地域ではなく、拠点と密接につながっており空間的に離れていても接触が容易であれば地域に含まれる。

また、地域の概念は、機能によって異なる。一律に規定することはできない。地域再生の主体もまた多様である。再生の活動は、地域の人々が内発的に取り組むことが望ましい。活動の中心的な担い手も、民間でなければ持続し難い。民間主導で多くの人々を巻き込むことが活力の源泉である。

もっとも、小さな地域の場合には、リーダーの出自は多様である。民間とは限らず、行政や経済団体の出身もありうる。

いずれにしても、現実の地域活動は、さまざまな関係者の協力ということになる。企業、行政、経済団体、公益的非営利組織、消費者団体、等々が協力する必要がある。大学もまたその一員である。

ただ、COCに関する文部科学省の資料にあるように「社会の変革のエンジンとなる大学づくり」「地域再生の核となる大学の形成」は、かなりオーバーな表現であろう。そもそも自己変革も容易でない大学が、社会の変革のエンジンになるとは思えない。また、地域再生の核となった大学を探すことも困難である。もっとも、「激しく変化する社会における機能の再構築」は不可欠の課題である。そのために、大学が組織として地域の課題解決に取り組む意義は大きいし、教育効果も期待できる。そのきっかけとしてのCOC事業の意義は十分に評価できる。

それにしても、大学の責務を教育・研究・社会貢献というように三つに機械的に区分する説明は気になる。むしろ、教育を通じて社会に多くの人財を供給することこそが社会貢献である。研究にしても、地域の課題を研究対象とし、解決方法を研究すれば、それが社会貢献である。とにかく、COC事業が「草の根の教育・研究」を重視し、大学が地域に眼を向ける動機づくりになれば結構なことである。

COC事業を円滑に進めるためには、地域再生における大学の役割を的確に位置づけることが必要であろう。

3 地域イノベーション

人口減少社会における地域再生ということになると、イノベーションが課題になろう。生産年齢人口が減少するから、増大する社会保障負担に耐えるためには、イノベーションによる生産性の上昇が必要になる。

さて、地域経済を振興するためには、次の三つの方法がある。(1) 企業誘致、(2) 財政による所得移転、(3) 地域産業の振興。

最近では、企業誘致は必ずしも現実的ではない。むしろ、かつて誘致した企業の撤退が続いている。また、財政による所得移転は、各種の補助金や公共投資に依存することになる。国の財政危機を考慮すると、長期的には財政による所得移転には限界がある。そうすると、地域に立地する既存産業の振興をはかるか、新産業を創出するしかない。既存産業の転換は、事実上「第2の創業」を意味する。とにかく新しい産業の創出に挑戦せざるをえない。

現在は、歴史的な社会変動の時代である。経済社会のパラダイムシフトが進展しつつある。まさに新旧交代の時代が到来している。地域における新産業の創出は、地域イノベーションの展開を意味する。この場合、イノベーションとは、新しい経済的社会的価値の創造を意味する。したがって、技術革新に限定されない。

地域イノベーションの手法としては、クラスター形成が有効である。最近では、クラスター政策も進化しつつある。法政大学地域研究センターでは、2012年に「地域活性化と産業再生」、2013年に「地域イノベーションのメカニズムと政策」と題するシンポジウムを行った。ノルウェー、スウェーデン、フランス、スイス、イタリアの各国から大学の研究者が参加した。イノベーションを促進するための仕組みと政策が議論され、クラスター論の進化ないし脱クラスター論が展開された。イノベーションを加速するために、企業の地域的集積ないしはネットワークを活用しようというのである。

注目すべきは、スウェーデンのルンド大学のアスハイム

教授の問題提起である。彼は、三つの知識ベースを類型化している。(1) 分析的知識 (analytical knowledge)、(2) 統合的知識 (synthetic knowledge)、(3) 象徴的知識 (symbolic knowledge)。

分析的知識とは、科学をベースにして創造された知識である。基礎研究からスタートし、大学等において新たに創造される。バイオテクノロジーやナノテクノロジーがその典型例である。

統合的知識とは、既存知識の応用や複数の知識の組み合わせによって生まれた知識である。例えば、エンジニアリングをベースにしたものが多く、典型は機械系の組立産業であるが、サービス産業も含まれる。

これに対して、象徴的知識はデザインやイメージなどの創造をベースにしている。典型は、ファッションやアニメなどの文化産業である。

この三者の関係を図示すると、図1ようになる。この三つのタイプの知識の創造にあたっては、それぞれ大学との関わりが存在する。分析的知識の分野では、基礎研究は主として大学が担当することになる。統合的知識の分野でも、大学は応用研究に寄与する。象徴的知識の分野でも、人材形成への大学の貢献度は大きい。そして、すべての分野で、政策研究について大学の果たす役割は大きい。大学は、戦略的に地域イノベーションに取り組むべきであろう。

なお、地域レベルでは、医療、介護、看護を統合した福祉社会づくりにおいて、大学に対する期待は大きい。統合的知識の分野における高度のサービス産業として、全国的に大学に対する期待は大きい。

4 外国の事例

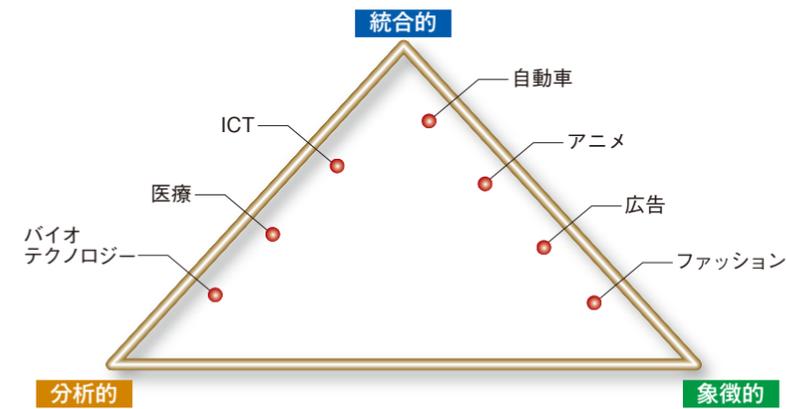
ここでは、対照的な二つの事例を紹介しておこう。

(1) フード・バレー

オランダのワーヘニンゲン市に「食品のシリコン・バレー」といわれるフード・バレーが立地している。ワーヘニンゲン市は人口4万人、「食品都市」と呼ばれている。

フード・バレーは食品科学におけるイノベーションの場

図1 知識ベースと産業



であり、ワーヘニンゲン大学・研究所を核にして、100を超える研究所、大企業、ベンチャーが集まっている。

ワーヘニンゲン大学のドメインは、食品及び食品生産、健康及び生活、生活環境の3分野である。食品化学部、食品物理学部、食品微生物学部、食品及びバイオ・プロセスエンジニアリング学部、製品デザイン・品質マネジメント学部など7学部と大学院、研究所、ほぼ150名の専門の研究者を擁している。学生数は約6,000名、留学生も多い。高度に専門化された大学なのである。2011年の収入は7.1億ユーロ、その半分が研究所の収入である。2012年のタイムズのランキングは70位、わが国の京大と東工大の中間にある。

フード・バレーは1990年代の後半から形成され始め現在では国際連携拠点となっている。なお、注意すべきは、ワーヘニンゲン大学が狭い地域の拠点になっているわけではないということである。同大学の現場は、オランダ全体の農業である。のみならず、ワーヘニンゲン地方は隣接するドイツの地方とともに、EUの国境を越えた地域形成政策の支援対象になっている。

フード・バレーは、専門性を有する広域的な拠点なのである。

(2) コーネル大学

コーネル大学は一流の研究型大学であり、特定の分野で国際拠点を形成している。だが、もともと万人に開かれた大学であり、地域貢献でも実績を有している。そして、

ミッションにパブリック・サービスを明記している。2010年～2015年の戦略プランを策定しているが、戦略の一環として地域社会への協力を挙げている。すなわち、コーネル大学の特徴はアウトリーチにあり、大学の外に出て知識をベースにして地域の問題解決をはかることを重視している。

アウトリーチのなかで注目すべきは、コーネル・コーペラティブ・エクステンション (CCE) である。地域連携で教育・研究のエクステンションを進めるのである。

すなわち、CCEは地域の活性化のために大学の知識を投入することをミッションにしている。そして、次の分野で地域のニーズに対応し、行政との協力を通じて変化をひき起こすビジョンを有している。優先する分野は、農業及び食品、環境・資源・エネルギー等、若者及び子供の教育、栄養、食品の安全等、地域社会と経済の活性化である。

具体的には、各カントリー毎にオフィスを設け、地方自治体と連携して地域のニーズに対応した問題解決をはかっている。主たるオフィスの数は50を超えている。資金的には、連邦、州、カントリーからの補助金、寄付などで賄っている。

いずれにしても、「草の根」の幅広い地域連携に特徴があり、コーネル大学はそれを21世紀型の大学戦略であると位置づけている。

わが国では、大学の地域貢献が最近になって漸く注目されるようになった。三鷹ネットワーク大学推進機構のような「民・学・産・公」のパートナーシップはまだ例外的な存在である。アメリカにおいては、健康の分野において「コミュニティ——キャンパス・パートナーシップス」が1996年に設立されている。コミュニティと大学のパートナーシップによって健康における公正と社会正義を推進するというのが、ミッションである。アメリカ社会の特性を反映したテーマである。ただ、こうしたパートナーシップは、今後多くの分野に広がることになろう。